かかわりを通して深まり，広がる図画工作科の学習

ー複式高学年「粘土から生まれる新しいかたち」の実践を通してー

加　藤　潔　己

1　研究の方向

本校図画工作科がめざす自立に向かう子どもの姿として，「柔軟性のある思考力」そして「洞察力」さらに「他者理解力」を備えた子ども像の構想がある。これは今までの３年間の研究のふり返りをもとに「自立に向かう子ども像」の見直しのなかで，再構築した諸能力のうち，本年度，焦点化してめざそうとするものである。その切り口として「人やものとのかかわりを通して」の学習づくりをめざした。図画工作科が求めようとする「創造的心情の育成」にとっては，活動に没頭することの重要性は言わずもがなであるが，さらに，自分だけの考えや視野にとどまらず，いろいろな見方，感じ方そして，かかわり方を深め，広げることをすすめる段階にきている。そのために鑑賞の能力を育成することの意味は大きい。鑑賞も，単に作品鑑賞の域を越えて，人とのかかわりのなかで，感じ取り，味わい，実感をともなって能動的に体験できる活動を仕組むことが望ましいと考えた。そこで，造形に携わる人との交流を通して，つまり「ひととのかかわりづくり」を通しての学習づくりを研究の方向とし取り組んだ。

本稿では，複式高学年図画工作科授業「粘土から生まれる新しいかたち」の実践をもとに，「かかわりづくり」の取り組みの有効性について考察する。

2　実践事例：複式高学年「粘土から生まれる新しいかたち」

(1)　題材設定の理由

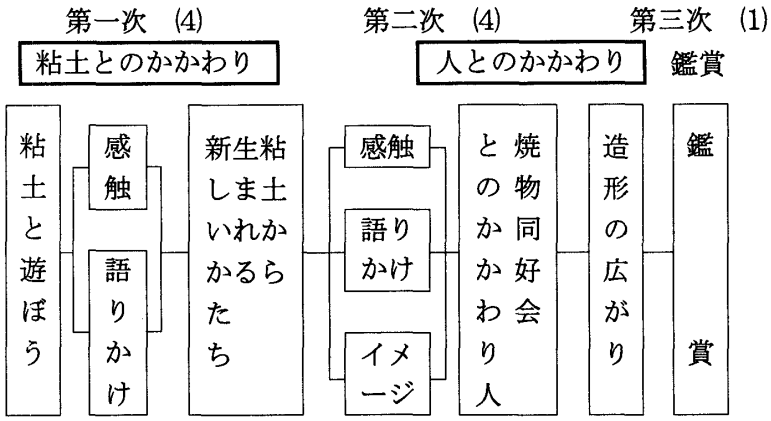
粘土による造形の面白さは，土に直接ふれ，土の感触を味わいながら，自分のイメージをかたちにしていくところにある。また，粘土は，焼成することにより，半永久的に保存でき，できた作品は生活のなかに取り入れ，生かす楽しみもある。

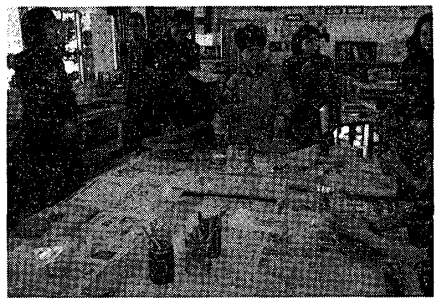
「粘土から生まれる新しいかたち」という題材名にあるように，つくるものを限定するのではなく，粘土（土）としっかり触れ合う（かかわる）ことを大切にしたい。十分に，その時間や環境を保障することで，子ども達が自分のなかにあるかたちのイメージを，粘土に語りかけながら，作り出すことに意味があると考える。さらに，PTA焼き物同好会の方（身近な存在でもある本校保護者）とのかかわりを通して，子ども達の粘土とのかかわりの世界が，広がりや深まりがもてるようになることもねらいとしたい。本学級の子ども達は，５年生，６年生とも，造形活動に意欲的に取り組み，休み時間や放課後でも，生活のなかに積極的に，絵を描いたり，ものづくりを取り入れたりしている。材料経験も豊富であるが，粘土による造形活動の経験は，幼稚園や低学年以来少なくなってきており，普段から，粘土の造形や焼き物づくりを要求してくる児童も多い。粘土によるいろいろな造形活動の経験を保障し，造形に携わる人々とのかかわりに触れることを通して，造形の世界を広げたい。

(2)　題材の指導目標

1．自分なりの思いにそって，粘土から新しいかたちを創造することを楽しむことができるようにする。
2．粘土としっかりとかかわり，土の感触を味わいながら，自分なりのイメージを追求することができるようにする。
3．自分や友達の工夫・発想のよさに気づき，互いに認め合う態度を養う。
4．焼き物同好会の人とのかかわりから，自分の造形の世界を広げることができるようにする。

(3) 指導内容と計画……9時間





(4) 授業設計の焦点

本時は，PTA焼き物同好会の方（本校保護者）を招き，お話を聞く時間を設ける。かかわりのポイントは次の二点としたい。一つは，同好会の方の焼き物に対する思いや苦労，失敗談などを聞くことによって，造形活動そのものの魅力や喜びに共感できるかであり，もう一つは，作品とどのようなかかわりをされてきたのかである。子ども達と同好会の方が，自然なかたちでかかわりができるように，作品をもとに具体的に話が出きる場や円形の座席にするなどの場の工夫をしたい。

(5) 授業仮説

仮説	同好会の方の焼き物に対する思いや苦労，失敗談などを聞く場をつくるなら，自分と作品のかかわりについての思いを広げたり，造形活動そのものの魅力や喜びに共感したりするなどして，造形の世界を広げることができるであろう。

(6) 評価の観点

造形への関心・意欲・態度	粘土としっかりかかわりながら，自分のイメージをかたちにしていくことを楽しんでいる。
発想や構想の能力	自分らしい発想や工夫を試みようとしている。
創造的な技能	素材の特徴をいかして，粘土から新しいかたちを創造しようとしている。
鑑賞の能力	自分の表現を温め，その喜びを味わおうとしている。

(7) 本時の目標

焼き物同好会の人とのかかわりから，自分の造形の世界を広げようとする。

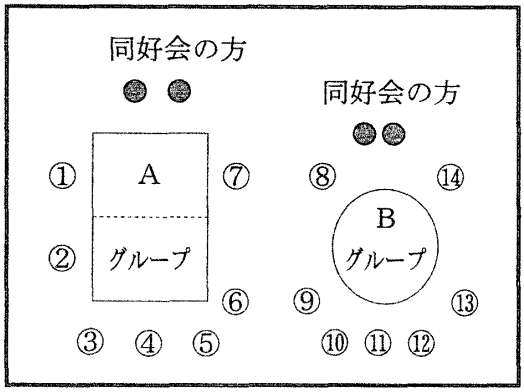
(8) 学習の展開の概要

日時　平成12年12月1日（金）AM 9：00～9：40　第105回東雲教育研究会　　於：図工室

学習活動	教師の働きかけ
1　制作の続きをする。	1　制作のなかで，粘土とのかかわりについて，ふり返ることができるように，次のような観点からの言葉かけをする。 ・粘土の感触について ・楽しめたところ ・思うようにできなかったところ

2　焼き物同好会の人から，お話を聞く。

図工室の席

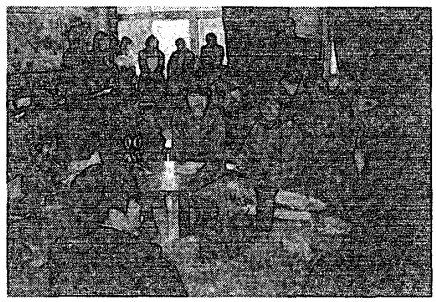


2　自然にかかわりができるように，作品をもとに具体的に話ができる場や，円形の座席の配置にする。

◎かかわりのポイントは次の二点とする。

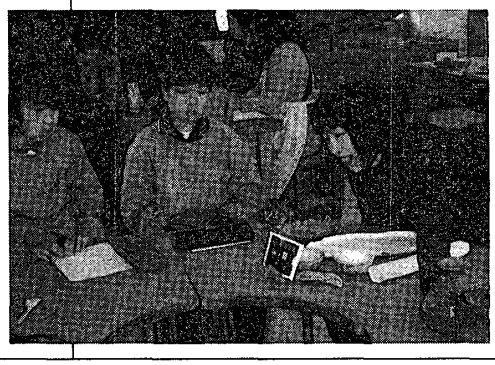
・造形活動の魅力や喜びへの共感

・作品へのかかわりの様子



子どもたちがあらかじめ考えていた質問

A グループ		B グループ	
6年男①	・ろくろでどうしたら，あんなにきれいになるのか？	6年女④	・粘土をのばすとひびが入ることがあるけど，それを防ぐには？
6年男③	・ろくろの使い方 ・焼いたときにひびが入らないようにするには？		・大きさをそろえるには？
5年男②	・ちゃわんの作り方 ・どんなろくろがいいのか？	6年女⑤	・ろくろで回しながら穴をあけるとき，粘土が斜めになって，まっすぐ立たないのですが，まっすぐに立てるコツは？
5年男①	・ろくろの使い方 ・つくっている途中にひびが入らないようにするには？ ・年間どれくらい作品をつくっておられるのか？	5年女⑥	・ろくろを使うのが上手なのは練習したからですか？ ・焼き物同好会に入られたわけは？ ・いままでにどんな物を作られましたか？
5年女⑤	・どんなときに使うものを作られているのか？		・失敗したことはありましたか？ ・今は，どんな物を作っますか？
6年女③	・一つの作品にかける時間 ・どんな物を作られたか？ ・どのように作ったものを活用しておられるのか？ ・同好会の時間は何時間くらい？ ・今まで一番心に残った思い出（の作品）は？ ・一つの作品を作るのに何時間くらいかかるのか？ ・色は焼いたら変わるのか？		・うまく作品ができたときはうれしいですか？ ・今，作ったり焼いたりすることは好きですか？
		6年男②	・ろくろを使うのは難しくありませんか？
		5年女⑧	・動物を作るときの目や耳の作り方
		5年女⑦	・ろくろ作りで，形作りはよくなってきたけど，口のところがまっすぐにならないので，口のところをまっすぐにする方法を教えてくだ
5年男③	・なぜこの会に入ろうと思われたのですか？		

	・窯（かま）がこわれていた間も，作品を作っておられたのですか？ 	5年男 ④	さい。 ・壺や湯呑みを一発で，きれいに作る方法があれば教えてほしい。 ・ろくろで作るのは簡単ですか？ ・苦労したことはありますか？ ・今まで作品は何個くらい作られたのですか？ ・作るものは，いつも考えておられるのか？

3　本時をふり返り次時の見通しを持つ。	3　PTA焼き物同好会の方との話から，自分の今までの活動をふり返る場を設定し，今後の活動についての見通しが持てるようにする。 ・自分の身の回りの人や，知っている人のなかで，造形を自分の生活に取り入れ，楽しんでいる人についての情報交換の場をもつ。 ・次時の予告をする。
4　後片づけをする。	4　作品の保管についての注意点を確認し，ていねいに片づけることを伝える。

(9)　授業後の子どもたちのふり返り

交流そのものについて	①自分の質問も聞けたし，同好会の方の話も聞けてよかった。 ②また，いろいろお話をしたい。 ③自分たちの質問に対し，きちんと分かりやすく答えてくれてうれしかった。
分かったこと	④まだ知らないことが，たくさん分かった。 ⑤いろいろな道具の使い方や種類が分かってよかった。 ⑥ろくろの使い方をいろいろ聞けてよかった。次にやる時に生かしたい。 ⑦ひびの防ぎ方が分かった。
アドバイスに関して	⑧自分が知らないことが分かったし，早速使ってみたのでよかった。 ⑨お皿がうまく作れるようになってよかった。 ⑩アドバイスを聞いてやってみたら，うまくいった。 ⑪難しいことをどうすればよいのか聞けた。
作品鑑賞について	⑫いろいろな作品を見せてもらってよかった。
もう少し聞きたいこと	⑬保存の時の水加減について ⑭木の棒を使って粘土をのばす方法について ⑮実際につくるところが見たい。 ⑯もっと確実にうまくつくる方法について

4　考察

本実践では，「ひととのかかわり」を通しての授業づくりの観点から，ゲストティーチャーとして，PTA焼き物同好会の方を招いての交流の場の設定を行った。その取り組みの有効性について考察したい。

授業仮説は「同好会の方の焼き物に対する思いや苦労，失敗談などを聞く場をつくるなら，a自分と作品のかかわりについての思いを広げたり，b造形活動そのものの魅力や喜びに共感したりするなどして，c造形の世界を広げることができるであろう。」であった。

子どもたちの「質問」，「ふり返り」の記述や授業観察から仮説について検証する。

aについて

5年男子④の質問「作るものは，いつも考えておられるのか」，6年女子③の質問「今まで一番心に残った思い出（の作品）は？」，5年女⑥「うまく作品ができたときはうれしいですか？」のように，自分が制作するときのアイデアや構想あるいは作品に対する思いと絡ませて質問している。自分と作品のかかわりについて思いをめぐらしていると考える。

bについて

「ふり返り」の記述のなかで，②，④そして，アドバイスを聞いての感想や試みについての感想⑧，⑨，⑩，作品を見ての感想⑫から造形に対する魅力や喜びについて交流がはかれたと考える。

cについては　⑬～⑯の記述，および焼き物同好会の方への手紙から考察したいが，本実践にとどまらず，今後交流を継続するなかで見とることが必要であると考えている。

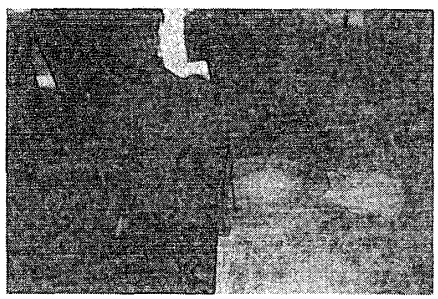
5　成果と課題

(1)　ゲストティーチャーと指導者の連携について

事前の打ち合わせで，子どもの思いや制作の実態，作品および子どもたちが質問したいことなどを連絡した。また，かかわりのなかで大切にしたいポイント（生涯学習）について，共通理解を図った。研究会の指導・助言者の先生から，ゲストティーチャーと子どもとのかかわり方のよさ，さらに，できた形（作品）をよりよく生かすすばらしさを子どもたちが伝えてもらっていたことには評価を頂いた。ただ，2グループにしたときの焼き物同好会の方からの情報（経験）の差をどう保証するべきかは課題である。

(2)　かかわり（交流）の継続について

同好会の方とのとのかかわりは「生涯学習の観点」の観点に立つものである。一度限りの交流で終わらないように，同好会の方と連絡を取り合って，継続した交流を取れるように考えている。また，子ども達にとっても，保護者の方として様々な機会でかかわりを広げ，深められるよう働きかけを配慮したい。



焼き物同好会の方へ　5年 名前 ＿＿＿＿

焼き物同好会の方々にいろいろ聞けてよかったと思います。その中でも，ろくろのことについてのいろいろなこと（中心のとりかたその他の形の作り方など）を聞けたのは大きな収かくになりました。四年生のときにろくろを使ったことがあったけど，使い方がわからなくてほとんどわんど板も同ぜんでした。ありがとうございました。

焼き物同好会の方へ　6年 名前 ＿＿＿＿

この間は，いろいろな事を教えてくださってどうもありがとうございました。いろいろな事がわかったので粘土を使って作品を作ることがもっと楽しくなりました。お皿も上手に作ることができ，うれしかったです。ありがとうございました。